

時評

メタン削減策 文化の多様性守る思考を

メタンという名前を聞いたことがあるだろう。水素と炭素の化合物で、常温では無色無臭の気体である。臭いガス、というイメージがあるが、それはまったくの誤解である。このメタンが最近、「温室効果ガス」ということで関心を集めている。とくに、畜産や農業の部門が大きな発生源だという。「牛のげっぷ」という揶揄で有名になったように、畜産部門での発生量が見逃せないようだ。だが日本の社会にとってもっと厄介なのは、水田が大きな発生源としてとりざたされていることだ。

日本の専門家たちもこれには敏感に動いた。調べた結果、「中干し」といって夏前に田の水を落とし、土に十分な酸素を与えてやるとメタンの発生が大きく抑えられることがわかってきたという。だが、「中干し」という技術は特殊な技術で、必要なときに必要なだけ水を供給できる灌漑システムが整備されている日本などごく一部の地域でしか行われてこなかった。多様なスタイルのある熱帯の「水田」にはこの技術はとうてい使えない。浮稲の田のように、雨季には数メートルもの水がたまる「田んぼ」では、中干しなど到底できることではない。仮にできたとしてもそれに要するエネルギーは膨大なものになる。

いつとき、熱帯の大河川の上流にダムを作り、中干しできるような灌漑技術を導入するといった大自然改造の議論が展開されたことがある。メタンの大発生地はアジアの水田地帯の中でも、とくにメコンやガンジスなどの大河の下流域に集中している。ちょっと考えるとこの自然改造は環境によさそうにも見えるが、熱帯の水田地帯では、稲作以外にもそこで魚を獲るなど、水田の多面的な利用に根ざす生活が営まれている。そうした生活は確かに遅れているようにみえるかもしれないが、それはそれでじつに「エコ」なのだ。

メタンだけに目を奪われ、中干しのできる稲作技術を導入しようものなら、そうした生活は根本のところから破壊されてしまう。彼らのエコな生活も奪われる。そして生活を奪われた農民が仕事を求めて都市に流れ込み新たな貧困を生んできたことは現代史の教えるところである。

日本はいろいろな面で高い技術をもっており、たいがいの問題をその技術力で解決してきた。その実績に裏打ちされた自信が、自然改造の発想につながっていると思われるが、こと環境問題に関して言えば技術的な改良の前に考えるべきことがいくつもある。その一つが、異なる文化を持った人びととその社会の存在だ。

「文化多様性」という言葉があるように、こうした文化の多様性を守ることは、生物の多様性を守ることと同じように大事なことなのである。トータルに考えればどうするのがよいのか。必要なものは、いろいろな角度からものを見ることのできる思考なのである。